

中等教育についての父兄の社会意識

都築 亨 倉田 有邦 富田 昇

1. 学園紛争以後の生徒の意識

「近ごろの若い者は…」といった形での、若い世代への大人の批判と、「うちのおやじときたら…」という調子の、若者たちの反撃は、恐らくあらゆる時代を通じて言われ続けてきたことであろう。社会通念に則って生活し、それを教え込もうとする大人と、その必要性を実感せず、束縛感に対して反撃する若者との衝突は、何も今に始まることではない。

ところで、数年前、全国的にひろがった学園紛争は、このいつの時代にもあった大人と若者の間の対立を、ことさらにいやが上にも浮きぱりにさせた。それまでには当然のこととして受けとられていたさまざまな慣習が、根底から価値を問い合わせられ、権威がその効力を失うかあるいは著しく低下させられるかした。イニシアチブを取ったのは、従来の通念からすれば異端的な考え方を持つ生徒たちであり、成績・素行の面よりも、日頃の態度言動の故に学校側ににらまれ易いタイプの者が多かった。これらの「異端的少数者」の掲げるスローガンは、従来の常識を大きく破るものではあったが、半面この常識なるものに対し、大部分の一般生徒は、ひそかにそしてまたかなりの反撃をいだいていたことも事実であった。そういうたった常識ないしは社会的通念に基いた。学校内における慣習・行事・制度・規則などが、さほどの支持、共感を得られないままにまかり通っていられたのは、それらに適応することが、あるいはそういった方向で努力することが、生徒としての正しいあり方なのだという。これまた社会通念によって支えられていたからであった。したがってひとたびその通念の持つ価値が動搖を来たした場合、特別の生徒ならずとも、通念に逆らい、常識を疑ってみたくなるのは当然であったろう。「平常時」だったならば「正常」な学校生活を送っていただろうと思われるかなり多数の生徒が、紛争時にはそれなりの言動をとった。平素だったら常識では考えられないほどの規則違反行為も、「非常時」の故にそれなりの穏便な処置ですませることが多かった。非常時には非常時なりの常識があったのである。

全国的にひろがった紛争も、当時の生徒が順次卒業するにつれて、すっかり影をひそめてしまった。現在

の学校には当時の騒然とした雰囲気などもうどこにも見当らないが、それでは紛争前の状態と全く同じのかというと、決してそうではない。そして、かつて紛争を経験した学校と、しなかった学校の間には、かなりの相違がみられるようである。紛争の産物を現在残している学校にある程度共通してみられる現象を拾い出していくと、それは「自由化」と「規律のゆるみ」ということに集約できそうである。

自由化といっても、その内容はさまざまで、服装に関するいえば、休日外出時の私服黙認から始まって、登下校時の無帽自由化、更に進んで遠足や旅行での非制服化から、ひいては制服撤廃に至るまで、その度合いはかなりの段階差がある。地域差も大きい。しかしながらいずれも、より統制強化の方向には進み得ない状況にあることはたしかであり、髪形の規制についても同様のことがいえる。また各学校で定めるカリキュラムも、学校によってはかなり自由な科目選択を許しているところがある。

規則の規定が緩和され、自由選択科目がふえることは、同時にマイナスの面を伴うものであり、遅刻・早退・自由欠席など、規律のゆるんでいるところもある。勉学と部活動の両方にうちこむ意欲が減退して、いずれにも取り組もうとしない生徒もふえている。

これらの現象を更にひとことで言い現わすならば、それは「価値の多様化」といえるであろう。そしてこれに対する反応は、生徒側にはその気楽さの故に概して好評であるのに対し、教師及び親たちには、規律のゆるみに目をつけてこれを非難する向きと、自由化多様化ということに対して好意的に見る向きとが併存しているようである。紛争の後遺症という見方と、雨降って地固まる式の成果と見る見方の相違といえるであろう。価値の多様化を言い換えれば、異端の許容ということにもなろう。異端そのものは少数者の信仰ではあっても、それを許容する雰囲気は、多くの人にとつて歓迎される。しかし一方には、異端者の存在に拒否反応を示す一群の人々もたしかに存在する。

現在の学校、特に高等学校は、この価値の多様化の波の中にある、大きくゆれ動いている。かつてのよ

うに、一部の尖鋭分子が多数の共感を背景に、教師や親に対抗するという形ではなく、紛争終結後の価値の変動とそれに対する受けとり方をめぐって、むしろ、教師や親の間に意見の対立・相違があり、それが生徒に直接・間接に反映して、比較的静かではあるが、根の深い対立を作り出しているといえる。

2. 親と教師の世代的構成と意識の変化

紛争時の活動家たちの闘争相手はもっぱら教師と親であり、彼らは教師・親を十把一からげにして攻撃したものである。多少の「ものわかりのよさ」などで受けつけなかった。むしろ巧妙な懷柔策と見られて、かえって反撲されるぐらいがおちであった。彼らが何よりも嫌ったことの一つに、学校側と親たちが、自分たちの仲だちを経ないで、秘密裡に情報を交換し合うことがあった。これは裏がえして言えば、親と教師は大体において同一の考え方をもった集団であり、教育についての価値観は、両者一致していたということであろう。学校は伝統的に、教育機能を独占する形をとり、家庭は教育については、そのほとんどを学校に委託して、地域社会ともども、補完的な役割を果すことにどまっていた。古くは、知育・德育・体育ということばで、戦後は全人教育ということばで、時代により、地域により、内容はいろいろ異なっても、根本理念は要するに、学校による、教育機能の独占、丸がかえであった。親たちはおおむね学校を信頼して子供を委託していたのであり、万一学校の方針に疑念を抱くようなことがあっても、公然とそれを表明することは、社会通念上、相当の決意と覚悟を必要とした。学園紛争はこのような仕組に対する反撲でもあった。

ところが、ここ数年、つまり紛争終結以後、こういった、学校・父兄対生徒という図式が、微妙な変化をみせてきているのが感じられる。生徒の変化については先にふれたが、その背景の一つとして更に父兄の意識の微妙なうつり変わりが感じられるのである。本校はいわゆる紛争校ではなかったが、紛争の横波程度のものは食らった。伝統的にかなり自由主義的であり、またその故に紛争めいたことがあっても深刻化はせずに済んだのであろうが、以前から、紛争後の公立普通科校（特に名古屋市内の）と似通った、もしくはもう少し自由化の進んだ段階の雰囲気を持っているといつてよいであろう。その本校において、昨年、遠足時の服装の取扱いをめぐって、ちょっとしたトラブルがあった。そして、それをきっかけに、従前から多少くすぶっていた制服問題がにわかに再燃したのであった。このあたりの事情は、生徒会関係の報告が本紀要の別頁に記載されているので、詳述はしないが、意外だったのは、一部の父兄の、それに対する対処・反応の仕

方であった。遠足当日のみならず、翌日の平常授業日にも、私服登校という実力行使をした生徒数名のうち、かなりの者が、親の了解ないしは支援（？）のもとにそれをやっていたのである。これは少くとも、筆者にとっては始めての事象であった。事の善悪はともかく、誇張気味に言うならば、学校対・父兄生徒という新たな対立が起り始めた感じがしたものであった。その父兄のある人たちが、戦後教育の原点をもって自他共に任ずる京都に縁の深い人たちであったことも示唆的などに感じられた。

全国的紛争時の高校生の親は、まず大部分が、戦時に青春を過ごした、いわゆる戦中派であった。それに対し、現在の高校生及び中学生の親は、戦中派から戦後派にその主力が推移しつつあり、年一年、確実に、かなりの急ピッチで後者が前者を追い抜いて行く過程にあるといえる。（ここでは便宜上、学制改革後、始めて全国一律に、小学校卒業者全員が新制中学1年となった、昭和22年度中学入学者以後の人々を戦後派と呼ぶこととする。）親の年齢層の幅は、当然のことではあるが、教師のそれよりかなり小さい。教師の年齢構成が、往々にして60歳台から20歳台に亘るのに対し、親の場合は、特殊な場合を別にすれば、中学もしくは高校の場合、せいぜい20年の開き、父母どちらかに限定すれば10年そこそこの開きに過ぎない。世代間に、特有の考え方、感じ方があるとするならば、少くとも教師集団よりは、父兄集団の方に、まとまった傾向が現われてくることが予想される。そしてそれはまた、自分の子どもたちの人格形成に、何らかの要因として影響を及ぼして行くことになると考えられるのである。

現在の中・高生の父兄の年齢構成を戦争を軸にして分けてみると、大体次のようになる。高校生の父親の大半は戦中派であるが、戦後派もかなり進出してきている。母親は戦中戦後両派ほぼ半々といったところ。中学生の父親は戦中派の方がわずかに多いが、戦後派も半数近くまでせまっており、母親はその大半が戦後派である、ごく一部には、戦時の記憶の全くない戦無派といった方が適切な世代も含まれている。戦後派が年一年、そのシェアをふやして行く中には、今が戦中戦後両派の分水嶺周辺にある人たちの教育觀を——特に中等教育についての——知る上で最もいい機会であるといえる。もとより親の意識がそのままストレートに子どもに反映するわけではないことは、十分承認の上である。子どもの小学卒業までの人格形成に、外から影響を及ぼす要因は他にもいろいろ考えられようが、親の及ぼす影響は、直接のしつけに限らず、平素の言動、態度、などを通し、無意識的にはう大な量に及んでいるはずである。世代間の意識の相違及びその推移は、親よりもむしろ当時の国家的・社会的大変動

と、それに伴う学校教育のあり方に、起因するものであったと考えられる。而してそのような特殊性をもった世代が、今度は親として子どもを育てた今、自分たちとはまた全く違った、思いもよらなかった次世代ができ上ってきてているというのが現状ではないだろうか。

こうした視点の上に、われわれは現在の中・高生の父兄の、学校教育についての意識を、世代別に調べ、ひいては、その生徒の意識への影響の仕方を探ってみようと試みた次第である。

3. 研究方法

昭和50年度中学1年～3年の子を持つ父母 936名

同 高校1年～3年の子を持つ父母 1,503名
計 2,439名を対象に、アンケート調査を実施した。

調査項目は以下順次述べて行く通りであるが、男女別に加えて、構成を重点的に見たい関係上、次のように年齢区分を設けた。(解説はアンケートには記していない。)

⑦ 大正生れ（昭和2、4月1日まで）

本格的な戦中派。戦中に成人もしくはそれに近いところまで達しており、軍隊経験者も多い。現在の父兄の中では、その占める割合はかなり小さくなってきており、特に母親は極めて少ない。

⑧ 昭和2年4月2日～6年4月1日

戦中派の後半に当たる人たちであり、戦中に青春時代を迎えた年代といえるであろう。戦時色一色の中で、「軍隊よりも軍隊的な」教育をうけ、一部の者は、少年志願兵に、あるいは軍関係の学校に在籍した。更に多くの者は、戦争末期の工場労働者を経験したはずである。困苦欠乏のどん底にあって、精神主義一辺倒の教育をうけ、それがピークに達したところで敗戦となった。

⑨ 昭和6年4月2日～9年4月1日

戦中派として扱ったが、戦後派的色彩もかなり濃厚な世代である。1で扱った世代との相違を求めるならば、終戦時には小6～中2であって、戦時の体質を血肉化させてはおらず、戦後の条件への適応も比較的スムーズになされたことが挙げられる。一方、次の第一次戦後派とは、主として学制改革のあおりの受け方に相違がある。旧制中学の経験者はこの世代が最後であり、入学後も制度の激変で、離合集散が甚しかった。筆者もこの世代の最後の年度に属しているが、2年間の旧制中学（2年目は下級生はおらず、併設中学と呼ばれていたと思う）、1年足らずの新制中学（三重県の場合、併設中学は解散させられた）、年度が變るたびごとに統合・分散をくり返した3年間の高校生活を経験した。もっとも旧制中学を経験しな

かった者の方がより多数であり、大都市では国民学校時代に学童疎開を経験しているなど。次の第一次戦後派との共通点も多い。戦時中の子どもの体質に戦後派感覚を接木したようなところがある。

⑩ 昭和9年4月2日～15年4月1日

典型的な戦後派であり、この世代からは全員が新制中学を経るようになった。都会地では学童疎開の経験者が多いことは前世代と共通している。焼け跡のバラック校舎で、空腹をかかえながら、戦後民主主義を説き聞かされたものである。男女共学の中で育ち、社会科の教科書では、中学で「新しい憲法の話」、高校では「民主主義上下」を使用し、実質的中身よりも、まず理想を高く遠くかけ、現実よりも観念が、ほんねよりたてまえが強調された教育を受けたといっていいであろう。

⑪ 昭和15年4月2日以降

戦後派の中でも、戦時中の記憶ないしは傷あととかいったものはほとんどない世代といってよいであろう。小学校入学以来、一貫して戦後教育をうけ、前世代にひき続いて、高校・大学への進学率が逐年急上昇を続けてきた関係上、高学歴者の割合がかなりふえている。もちろん父兄としてはかなり若い親であるので、まだ、母親のはんの一部を構成している程度で、そのシェアは至って少ない。ただし、ここ数年のうちに、まず中学生の母親から始まって、漸次父親層にそして高校の方へとその勢力は及んで行くはずである。

なお、今回の調査の対象外ではあるが、戦後生まれのごく若い親たち（その子どもたちの「はしり」がそろそろ学齢に達し始めている）の意識がどのようなものであり、それが子どもに如何なる影響を及ぼすかという問題は、それなりに極めて興味深い問題であろうと思われる。第二次のベビーブームがどのような特質をもった世代を生み出すか、いろいろな意味で注目されるところである。

4. 中等教育についての父母の一般的期待

現在、高校進学率は91.9%にまで上昇し、その91.9%内に子供を送りこむためにしては、あまりにも過熱している中学校の受験準備教育と、そこから更に、37.8%を示す様になった大学・専門教育とにはさまれて、高校教育は大きくゆれ動き、学校が何のためにあるのかその存在理由をさえ問いつめられかねない状況にある。

一昔前と比べて、中学校はともかく、高校は大きくその社会的基底をかえてきたのである。にもかかわらず、その高校の変質を容易に認識できないままにいる高校教師、高校・大学進学コースにかつてのエリート

コースの幻影を見出して、高校普通科のコースに自分の果せなかつた夢を実現させようとする父母の期待、そして3分の2以上が教育内容についてゆけないといわれる生徒たちの実態との間にはどうしようもない懸隔を生じつつある。

現実に学校の在り方を混乱させている要因は、人間形成・全人教育という立て前論と、91.9%の大衆教育化状況と37.8%のもつ受験体制の中で、1人でも多く高校へ、大学へと進学させねばならないという現実論との相剋といつてもよいが、それに政治的、イデオロギー的論議がからまつてくると、中等教育をめぐる論議は救いようのない泥沼にふみこまざるを得ない。

現在、中等教育に特に深刻に表われている荒廃・無力感、「学校は死んだ」とさえ言わせることになった現実は、生徒の学力の低下、大衆化状況によるというよりも、その状況の中での教師・父兄・生徒のそれぞれの意識の隔絶、背離によるものといってよいのではないかだろうか。

教師と生徒との間に横たわる断絶を埋めるための努力は、それなりに続ける必要はあるにしても、20台から60台にわたる教師の意識の幅、思想的立場の隔絶を

うめることは多分に困難であり、その隔絶を縮めるためにむしろ、世代の接近している父母の教育に対する要求・期待を集約し、今後の高校の在り方をレリーフするためのカンバスを画定する必要があるのではないかと考えるからである。

以下各論的な教育の問題へのアプローチを試みる前に、中学・高校が本来「どのようにあるべきか」「どの点に重点をおくべきか」質問項目の第一とした。

1. 中・高等学校の教育では、下記のどの点に重点をおくべきだとお考えになりますか。第一にあげたい点を1つ(もしそれが選びにくい場合は2~3でもかまいません)記号であげて下さい。
 - ア. 人間形成、集団生活への適応を中心。
 - イ. 大学(高校)進学、受験指導、進路指導を重点に。
 - ウ. 受験準備に限らず基本的学力の充実を。
 - エ. 芸術体育を含めた幅広い学力と教養を。
 - オ. 部活動、生徒会等を中心に自治的態度の育成を。

アンケートした対象は中学校・高等学校に子供たちをおくっている父母・総数2,439名である。(下段%)

	大正生れ 父 母	昭和元~6 父 母	昭和6~9 父 母	昭和9以後 父 母	父親計	母親計	合計				
ア. 人間形成	134	37	209	122	101	132	46	151	490	442	932
イ. 受験指導、進学指導を	47	10	63	41	26	47	8	42	144	140	284
ウ. 基本的学力の充実を	125	30	212	167	139	190	57	262	533	649	1,182
エ. 幅広い学力と教養を	37	9	51	35	21	37	16	49	125	130	255
オ. 自治的態度の育成	5	1	6	4	11	3	1	7	23	15	38
ア. 人間形成	42	48	42	38	36	35	38	32	37	32	35
イ. 受験指導、進学指導を	14	13	12	12	9	13	7	9	11	10	11
ウ. 基本的学力の充実を	39	39	42	52	50	51	47	56	41	47	44
エ. 幅広い学力と教養を	11	11	10	11	7	10	13	10	10	9	9
オ. 自治的態度の育成	1	1	1	1	4	1	1	2	1	1	1

中学・高校の父母別に集計した結果も、まとめた上記の%と殆んど変らず、<ウ>の「受験に限らず基本的学力の充実を」という回答が、昭和9年生れ以後の若い階層、特に母親層(中学については父親も53%)に多く寄せられている位の特徴がうかがえるだけである。<ア>は立て前指向型、<イ>は現実指向型、<ウ>は現実からの脱却を求める常識型、<エ>は教養指向型、<オ>は自治活動指向型とでもいえようが、「…べきか」というアンケートに対して<ウ>が多いのは或る程度予想されることとして、それが父母の年齢の下降するに伴い、<ア>から<ウ>に傾斜がかかってるのは注目してよい現象であろう。

「受験指導を重点に」という現実指向、上構型が10~

14%を示すのは、本校で日常接している限りでのPTAなどの発言、要望からするとむしろ意外に低いとも思われるが、本校での3年生の保護者の論議が、「もっとしっかりした受験指導をしてほしい」という要望と、「受験に偏らないで本来の教育を」という別の父母の希望とがきびしく対立し、白熱化したことと考えあわせると、附属という特殊な(受験指導をしないという学校の方針を承知の上で子弟をよこしている父兄と、にもかかわらず附属なら進学率がよいだろうと期待して進学させている父兄との両方が含まれる)条件が、上掲の結果に反映されているのではないかという判断から、調査校別に、<ア><イ><ウ>の対比を試みた。

		大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	父親 %	母親 %	合計	全%
A 校 (中)	ア	15 4 13	1 0 1	28 4 45	4 0 17	21 25 38	36 13 63	17 1 20	36 13 63	81 16 116	66 19 119
	イ									34 7 48	28 8 51
	ウ									147 35 235	31 7 50
B 校 (中)	ア	11		28 5 28	14 1 13	13 2 16	21 2 22	4 1 5	16 6 36	56 10 57	51 9 71
	イ									41 7 42	36 6 50
	ウ									107 19 128	38 7 46
C 校 (中)	ア	5 1 5	1 1 3	14 4 11	6 3 8	20 2 20	6 2 12	9 2 19	24 7 44	48 9 55	37 13 67
	イ									35 7 40	36 9 47
	ウ									85 22 122	35 9 50
D 校 (高)	ア	47 24 46	16 6 14	65 35 55	49 23 67	15 7 19	35 21 44	3 12 7	32 12 41	130 66 127	132 62 166
	イ									35 18 35	33 16 42
	ウ									262 128 293	34 17 38
E 校 (高)	ア	53 18 32	4 2 6	47 5 44	39 8 53	28 6 61	42 15 52		39	50 8 46	48 10 63
	イ								39	42 7 39	34 7 45
	ウ									98 18 109	38 7 42
F 校 (高)	ア	34 24 41	15 3 38	33 13 46	43 16 43	36 18 55	26 19 53		48	39 21 53	47 21 56
	イ								48	30 16 41	34 15 40
	ウ									86 42 109	32 16 41
G 校 (高)	ア	15 2 13	7 2 2	17 2 15	13 3 16	10 1 11	11 1 20	7 2 3	16 3 13	49 5 42	47 5 52
	イ									45 5 39	41 7 45
	ウ									96 13 94	43 6 42

学校間の差は殆んど無く、せいぜいD(高校)とF(高校)に<イ>のウエイトがかかっている程度である。

義務教育であり、学区制をとっている中学校の父母の教育への期待に差が見られたらむしろ不思議といえようが、進学校とそうでない普通科校、工業高校等とかなり組成の異なる高校の父母たちの学校教育に対する一般的期待は、地域・学校の種別(ただし、調査校は附属の他、公立中学、名古屋市内の学校群高校、千葉・福島・富山各県の普通科高校であり、私立校は入っていない)にかかわりなく、ほぼ共通した一般的期待をもっていると見てよいのではないだろうか。

即ち、人間形成・集団への適応35%、受験進学指導10%、基本的学力の充実45%、幅の広い学力・教養9%、自治的態度部活動1%である。

5. 制服問題を中心に、指導のあり方をめぐって

学校の「指導」について、紛争の頃まで、父兄はすべてを学校に任す姿勢をとっていた。学校の規則は必

らず守らせねばならないもの、制服が定められているならば、当然外出は制服でなければならないだろう。と少なくとも表面上そうしてきた。そして学校の指導と父兄の意識には大きな隔絶——みぞは感じられなかった。

しかし前述のように、父母の意識と学校の指導との間に微妙な関係を生じてきた昨今、「指導」をめぐる父兄の意識をさぐることは、現実的にもかなり喫緊のこととなってきた。制服問題を中心としたのは、いろいろの父兄の発言や生徒への助言が出ている中で、特に本校内での生徒の制服自由化論議が、かなり、父母の「自由にしてよいのではなかろうか」という支持に頼って進められた経緯があり、又制服を改正するためには、生徒だけでなく、父兄や教官の意向をも固めなければならないということで、父兄の一部に対し、生徒会がアンケートを試みた実績をもっているからである。(本紀要20集生徒の自主性を生かした生徒会指導の試み参照)生徒らしいかなり指向性をもったアンケート項目のとり方だったにしても、自由化賛成の意

向は91名中12名にみられ、更に生徒の意志に任せるという態度が30名ほどみられたことは、予想外のことであり、父兄の考え方が随分変ってきたと思わせるに充分であったからである。

筆者自身は制服を自由にすることが必ずしも進歩的なこととは思っていないし、自由化論議がいわゆる有名校・エリート校について起っている現象であることを重視したいのであるが、更に重く見たいのは父母の発言の中に「子供たちに任したい」という極めてものわかりのよい回答が多く見られる様になってきていることである。制服のみならず、この傾向は、学校・生徒・父母をめぐるすべてにわたっているといってよいであろう。

ものわかりのよい教師は往々にして生徒の自主的態

度をスパイルし、ものわかりをよく見せることで、自己の責任を回避する傾向があるが、父母の場合も同様ではないだろうか。

制服を中心においてはみたが、本質的には指導のあり方についての根本的な問題にかかわることであり、そこをより所にして、生活指導についてのいくつかのアンケートを用意した。

①制服についてどの様に考えるか、②経済的にみて制服・私服の何れがよいか、③指導を中心と考えて制服・私服の何れが好ましいか、④男子の生徒で女子と同じ様な長髪の生徒が多くなったことについて、⑤学校での生活指導の現状について生ぬるいと考えるかきびしいと考えているか、等々。

以下そのまとめである。

① 学校の制服について、どのようにお考えになりますか。

		大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計				
実 数	ア. 帰属意識を高めるため当然	168	35	244	164	157	193	64	261	633	653	1,286
	イ. 非行化防止の歯止めになる	22	6	23	22	17	24	7	38	69	90	159
	ウ. 標準服とすればよい	80	23	160	82	70	107	39	133	349	345	694
	エ. 廃止は時期尚早。	22	9	42	30	18	33	7	28	89	100	189
	オ. 服装は自由にすればよい	18	4	28	17	14	18	5	14	65	53	118
%	ア. 帰属意識を高めるため当然	53	46	49	51	57	52	53	56	53	53	53
	イ. 非行化防止の歯止めになる	7	7	4	6	6	6	6	8	6	7	7
	ウ. 標準服とすればよい	25	30	32	25	25	29	32	38	29	28	28
	エ. 廃止は時期尚早。	7	11	8	9	6	9	6	6	7	8	8
	オ. 服装は自由にすればよい	5	5	5	5	5	5	4	3	5	4	5

② 父兄の経済的負担を中心と考えた場合、制服私服の何れが好ましいとお考えになりますか。

		大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計				
実 数	ア. 制服に限る	179	41	277	156	164	187	75	280	695	664	1,359
	イ. どちらかといえば制服に	82	28	163	113	78	137	31	148	354	426	780
	ウ. どちらともいえない	25	3	40	34	17	23	10	25	92	85	177
	エ. どちらかといえば私服に	16	4	14	6	8	21	3	9	41	40	81
	オ. 私服に限る	7		13	7	7	6	2	8	29	21	50
%	ア. 制服に限る	57	53	55	49	60	50	62	60	58	54	56
	イ. どちらかといえば制服に	26	36	32	35	28	37	26	32	29	34	32
	ウ. どちらともいえない	7	3	8	10	6	6	8	5	8	7	7
	エ. どちらかといえば私服に	5	5	2	1	2	6	2	2	3	3	3
	オ. 私服に限る	2		2	2	2	2	2	2	2	2	2

③ 学校における指導を中心に考えて、制服私服の何れが好ましいとお考えになりますか。

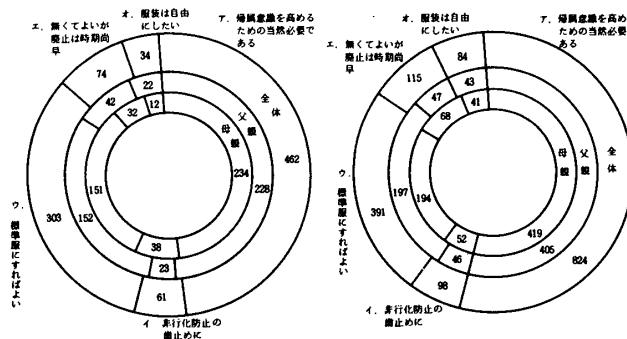
		大正生 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計				
実数	ア. 制服に限る	182	39	299	165	169	194	79	279	729	677	1,406
	イ. どちらかといえば制服に	84	28	131	110	78	132	29	157	322	427	749
	ウ. どちらともいえない	25	6	33	24	14	31	9	19	81	80	161
	エ. どちらかといえば私服に	9	3	19	12	8	10	3	12	39	37	76
	オ. 私服に限る	9		12	7	5	6		6	26	19	45
%	ア. 制服に限る	57	51	60	52	61	52	65	59	61	55	58
	イ. どちらかといえば制服に	26	36	26	34	28	35	24	33	27	35	31
	ウ. どちらともいえない	7	7	6	7	5	8	7	4	7	6	7
	エ. どちらかといえば私服に	2	3	3	3	2	3	2	3	3	3	3
	オ. 私服に限る	2		2	2	1	2		1	2	1	2

④ 男子生徒で女子と同様な長髪の生徒が目立ってきていますが、こういう現象についてどう思われますか。

		大正生 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計				
実数	ア. 禁止すべきである	134	23	222	126	144	151	54	229	554	529	1,083
	イ. 規制する程のことはない	122	35	213	146	88	167	39	186	462	534	996
	ウ. 時代の反映でどういうこともない	50	18	70	42	39	53	26	58	185	171	356
	エ. むしろ好ましい	3		4	1	3	4	1	3	11	8	19
%	ア. 禁止すべきである	42	30	44	39	52	40	45	49	46	43	44
	イ. 規制する程のことはない	38	46	42	46	32	45	32	40	38	43	41
	ウ. 時代の反映でどういうこともない	15	23	14	13	14	14	22	12	15	14	15
	エ. むしろ好ましい					1	1	1	1	1	1	1

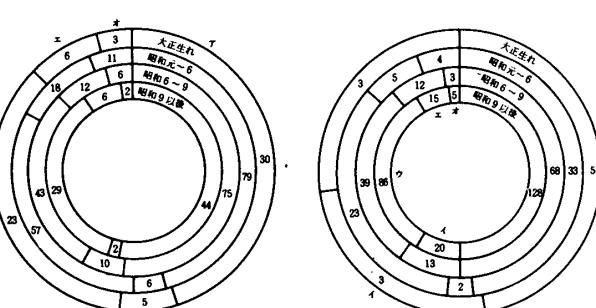
学校の制服についての一般的判断を中学・高校の父
母別に見、更にそれぞれ年代別に図示すると次の如く
になる。

中学 (外より全体、父親、母親) 高校 (外より全体、父親、母親)

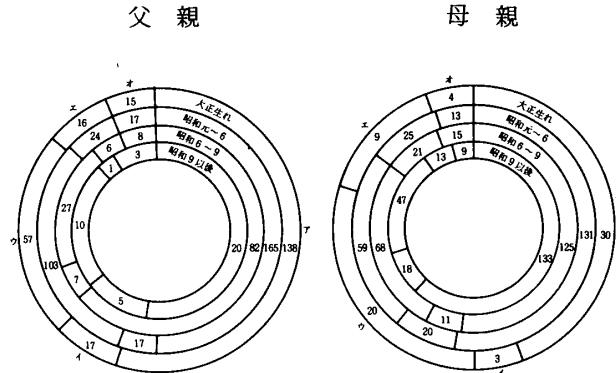


中学生の父親と母親での世代別の結果は、

父 母 母親



高校での父親、母親の世代別のまとめ



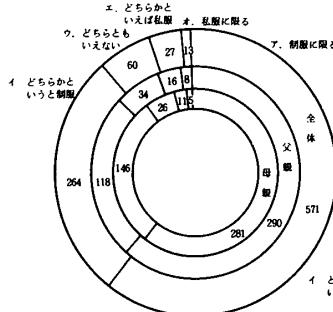
ほぼ同様な反応ながら中学校の父母よりも高校の父母の方が制服支持意向が表明され(62%)又中・高を通じて年齢の高い父母よりも若い(昭和生れの)父母の方が制服支持が多く、又自由にした方がよいとする者が少ない(有意差なし)。これは予想とはかなり異った結果であった。制服をなくして自由にしてよいのではないかという少数意向はむしろオールドリベラリストのものかもしれない。

経済的負担からみて制服はどうか。同様に中学、高校別、父母の年齢層別にグラフ化してみると次の様になる。

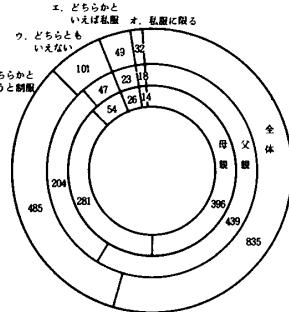
指導面のメリットを意識しての制服支持派も経済的負担からみてのそれとほとんど%においてかわらず、学校による差はみとめられるにしても、その同じ学校での②、③の<ア>と<イ>とを合計した%はすべて同%である。(②に<ア>と答えた者が③で<ア>と回答しているかというと必ずしもそうではない)

指導上からみて制服・私服の何が好ましいと考えているか、中学校と、高校の父母の間には、先の項目と共に一つの傾向をみてとることができる。

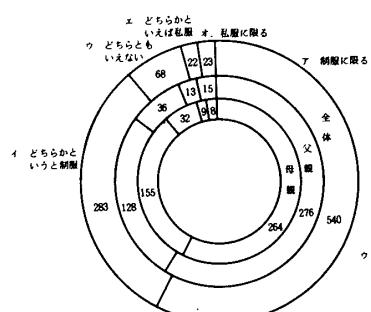
中 学



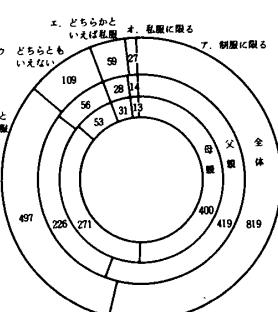
高 校



中 学

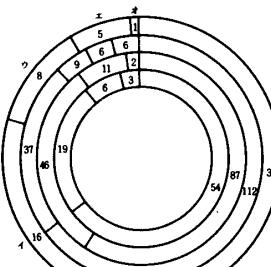


高 校

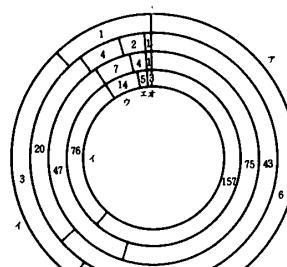


中学校の父母別に世代毎の反応

父 親

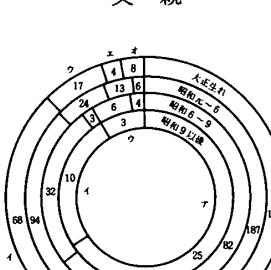


母 親

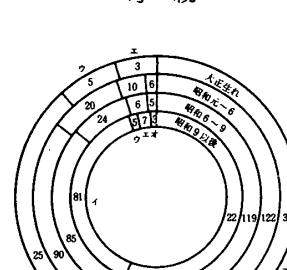


同じく高校では

父 親



母 親



経済的視点を加えるとき、中学校の父母の方が大きく制服指向を示し、「どちらかといえれば制服の方がよい」と考えるものまで含めると90%以上が制服指向を示す。一般的には制服が高いという観点もあるが、制服であれば一着ですむのに私服となれば一着ではもし安価だとしても数倍する着替えを必要とすることは母親ならずとも充分に感じとっているのであろう。

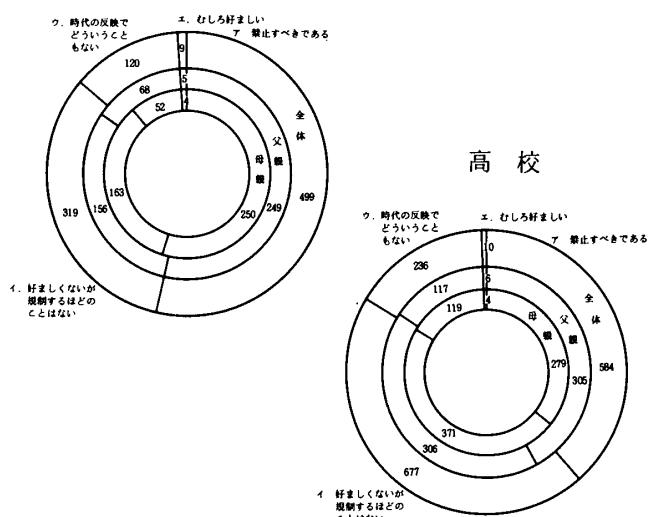
〈ア〉〈イ〉の合計は何れも90%程度で世代の違いにもかかわらず、制服を好ましいとする者が圧倒的に多く、又比率も殆んど差がないといつてよい。ただし高校の父親と母親の反応に差があり、どの世代についても「制服に限る」とするものが父親の方に多くみられたのはどのように考えたらよいだろうか。

何れにせよ制服について、世代による差のあらわれることを予想し、若い父母にはかなり私服指向が出るのではないかと考えたのであるが、一般的的傾向としては全くその裏付けをとることができなかった。むしろ父親の反応の中には若い世代（昭和2ケタ）ほど制服指向がつよくうかがえたほどである。

制服をめぐる意識が父兄の世代間の社会意識のメルクマールになるのではなかろうかというわれわれの仮説はくつがえされたことになるが、この中の中学生の父母と高校生の父母の微妙な差異は今後の教育指導を考えるときの1つのポイントとなるであろう。

男子の生徒の中に長髪が多くなっている傾向は一般的にみられ、中学校では（或は一部高校でも）かなりきびしく規制（禁止）しているのが実体であろうが、「女子と同様な長髪の生徒が目立ってきてる現象について」アンケートを求めた。

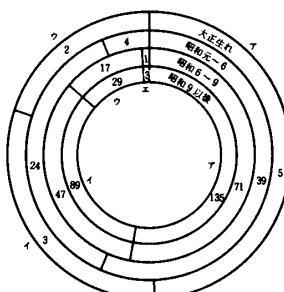
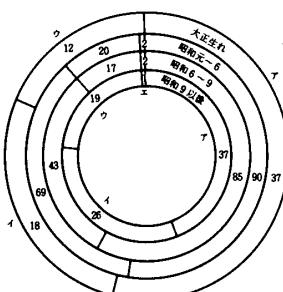
中 学



これを禁止すべきものと考える〈ア〉の反応と、好ましくはないが学校で規制する程のことはない。とする〈イ〉とのちがいを、父親と母親との間にみとめることはできない。できるとすれば、中学校の父母と高校の父母との間、それぞれの世代の間においてである。制服の問題よりも、この点に関しての方が、回答の差のひろがりをうかがうことができる。

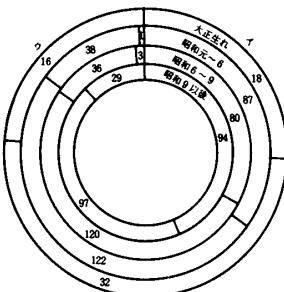
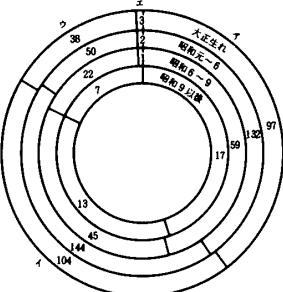
中学校の父母の反応をそれぞれ世代別にみてみると、

父 親



高校より中学の父母の方が長髪を禁止すべきものとしているが、高校の父母の反応は、

父 親

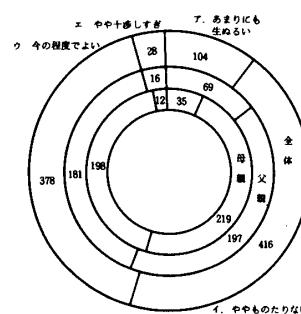


長髪については母親の方がかなり寛容であり、好ましくはないという反応は中学の親、父親層と同様ながら、規制するほどのことはないという回答が、母親、特に昭和1ケタ以上の年輩層の母親に比較的多くみられる事である。冒頭に指摘した「ものわかりのよさ」は同年輩層の50%にあたるこうしたニュアンスの意識に支えられているのではないだろうか。長髪をむしろ好ましいとするのは全調査校を通じて19名のみであり、その間に世代の差は見当らなかった。

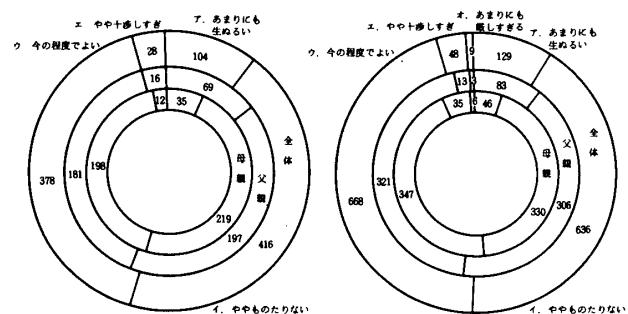
全般的にみて、生活指導の現状について父兄は一体どのように感じとっているのだろうか。

中学高校別に図示すると次の様になるが

中 学



高 校



中等教育についての父兄の社会意識

⑤ 学校での生活指導の現状について常々どのような感想をお持ちですか。

		大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	合計
実 数	ア. あまりにも生ぬるい	37	7	62	17	37	27	16
	イ. ややもの足りないと感ずる	124	35	213	135	116	170	50
	ウ. 今の程度でよい	134	30	208	154	109	154	51
	エ. やや干渉しすぎる	8	4	12	8	6	19	3
	オ. あまりにも厳しすぎる			2	1	2	1	5
% %	ア. あまりにも生ぬるい	11	9	12	5	13	7	13
	イ. ややもの足りないと感ずる	39	46	42	42	42	45	42
	ウ. 今の程度でよい	42	39	41	48	39	41	42
	エ. やや干渉しすぎる	2	5	2	2	2	5	3
	オ. あまりにも厳しすぎる					1	1	1

大正世代では父母の間に差はみとめられないが昭和元年～9年生れの父親に現状を生ぬるいとするア・イ指向が目立ち、母親とはかなり大きく反応の差を認めることができる。そして9年生れ以後の若い父母ではその差は再び縮まる傾向をみせているのであるが、特

徴的なのは昭和1ケタ世代の父と母の教育におけるきびしさのうけとめ方である。

これをアンケート項目の第1中学・高校の教育で第一に重点をおくべき点でア～ウとした者について、それぞれ生活指導の現状についての回答をみると、

(1) <ア>人間形成・集団生活への適応を第一に重点におくとした者が、生活指導の現状について

		大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	父親 %	母親 %	合計
ア. あまりに生ぬるい	9	2	12	4	2	7	3	5	26	18
イ. ややものたりない	40	19	59	43	23	27	3	32	125	121
ウ. 今の程度でよい	48	12	56	31	20	31	10	37	134	111
エ. やや干渉しすぎる	2	1	1	2		7	1	1	4	11
オ. あまりに厳しすぎる			1			3			1	4

(2) <イ>進学受験指導を第一とする者が生活指導の現状に対して

		大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	父親 %	母親 %	合計
ア. あまりに生ぬるい	5	1	8	5	3	1	19	4	18	23
イ. ややものたりない	10	5	24	15	7	20	1	42	53	95
ウ. 今の程度でよい	21	3	14	14	4	12	1	40	37	77
エ. やや干渉しすぎる	1		1	3		1		2	4	6
オ. あまりに厳しすぎる			1			1		1	1	1

(3) <ウ>基本的学力の充実を第一とする者が生活指導の現状について

		大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	父親 %	母親 %	合計
ア. あまりに生ぬるい	11		13	5	9	7	1	7	34	19
イ. ややものたりない	36	9	43	46	30	44	9	46	118	145
ウ. 今の程度でよい	38	10	57	51	22	64	4	41	121	166
エ. やや干渉しすぎる	2	3	1	1		5	2	3	11	1
オ. あまりに厳しすぎる			1			1		1	2	2

総じていえば、第1項目である教育の重点をどのようにうけとめているか、その意識にかかわりなく、生活指導の現状についての見方は相似た反応を示しているといえそうである。それは生活指導の現状について生ぬるいとするのは受験進学指向の父兄に多いという予測は立つが、世代による差も、中学と高校の差も有意の差とするに足りない。基本的学力の充実を第一とする者も、幅広い学力教養を第一とする者も、現在の中学校や高校での生活指導に不満を表明しているのは、生活指導におけるきびしさが教育の理念とは別の次元において要求されるものであることを示してはいないだろうか。

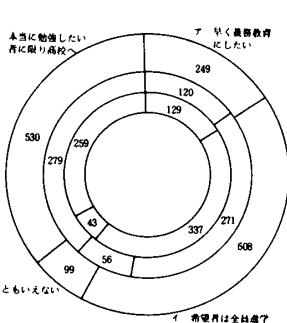
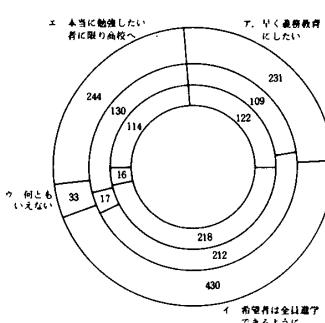
6. 高校進学率の上昇とそれに伴う高校の在り方について

高校への進学率が91.9%に上昇したという事実は、その発展の初期(25年)において42.5%にすぎず、10年前(40年)においても70.6%であった高校の在り方をかえずにはおかれない大きな問題としてとらえられねばならない。たしかに大衆化したのである。しかしその事は当然それまでの時点で編制された教育課程の内容についてゆけない何分の一かの生徒たちをはみ出させることになるし、能力に応じて校内で課程を分ければ差別を各学校で、課程に応じて選抜をきびしくすれば

問 中学校から高校への進学率が91.9%となっていった現在、高校へ全入させたらどうかが論議されています。これについてどの様にお考えになりますか。

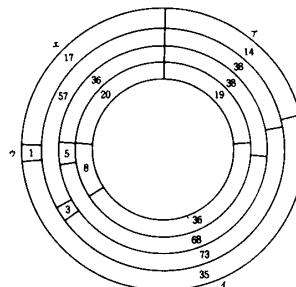
		大正生 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父 親 計	母 親 計	合 計
実数	ア. 義務教育にすべきである	53	14	91	51	60	69	229
	イ. 希望者は全員進学させる	126	37	196	149	111	168	483
	ウ. 何ともいえない	24	3	22	13	13	23	73
	エ. 本当に勉強したい者に限る	105	22	188	107	87	117	409
%	ア. 義務教育にすべきである	16	18	18	16	22	18	21
	イ. 希望者は全員進学させる	40	48	39	47	41	45	41
	ウ. 何ともいえない	7	3	4	4	5	6	6
	エ. 本当に勉強したい者に限る	33	28	37	33	32	31	34

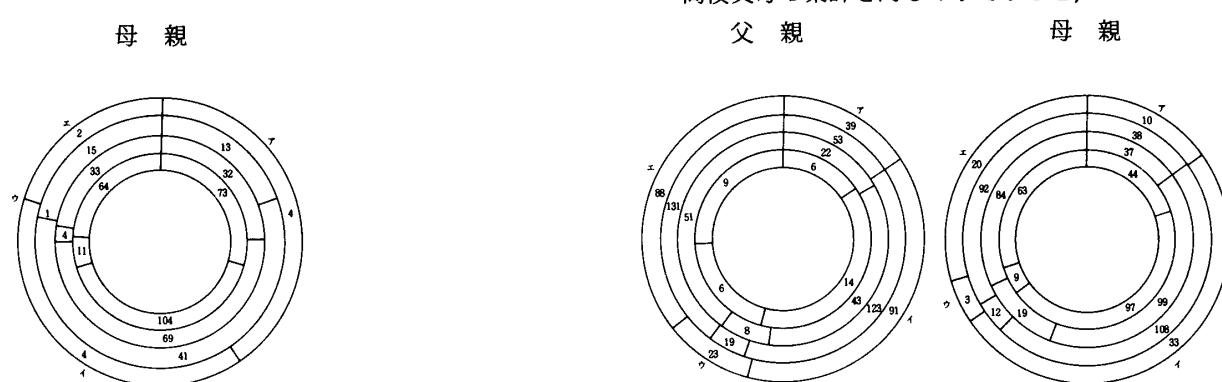
これを、中学校・高校の父母別にグラフ化してみると、



内容の差をたしかめることができよう。

中学校の父・母別に
年代別グラフにして
みると





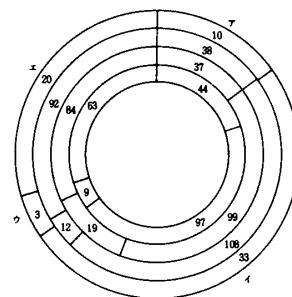
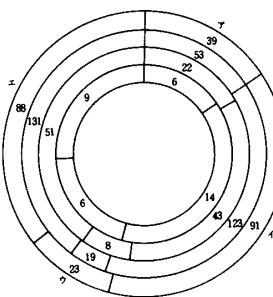
世代による意識の差はほとんどないが、父親の昭和元～6代及び6～9代に義務化に否定的反応が示され中学生の父母と高校生の父母において、義務教育にすべきであるとする数と本当に勉強したい者に限って進学すればよいとする数とが微妙にくいちがって明らかに相異を示しているのをどのように考えればよいのだろうか。

同世代の親であっても、子供が中学生の時は義務教育とすることを期待し、高校へ入ってしまうと、本当

高校父母の集計と同じくみてみると、

父 親

母 親



に勉強する者だけ進学すべきであると変心するのだろうか。高校の調査校が市内では学校群に入っている高校3であること（人員 $\frac{1,120}{1,330}$ ）はこの調査の歪みを感じさせるが、最エリート校の父親の50%がエを指向していることの外は、普通科・工業課程とも有意の差は見出されない。

先述の生活指導と同様に、高校生の父母について、アンケートの第一項目の各選択肢につき、それぞれ、高校の現状打開策をまとめてみると

(1) <ア>人間形成・集団生活への適応を第一とする人は、

	大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	父親 %	母親 %	合計
ア. 義務教育にすべき	15 5	24 12	7 15	4 12	50	44	17	17	94
イ. 希望者は全員進学	39 17	53 38	17 34	7 37	116	126	40	48	242
ウ. 何ともいえない	9 3	8 3	3 7	2 3	22	16	8	6	38
エ. 本当に勉強したい者 のみ	36 9	44 28	18 19	4 23	102	79	35	30	181

(2) <イ>進学受験を第一とする人について

	大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	父親 %	母親 %	合計
ア. 義務教育にすべき	7 1	7 4	1 6	3	15	14	14	14	29
イ. 希望者は全員進学	10 3	13 14	4 13	1 7	28	37	27	38	65
ウ. 何ともいえない	8 1	4 5	2	1 2	13	10	13	10	23
エ. 本当に勉強したい者 のみ	13 4	23 9	10 16	1 5	47	38	45	39	85

(3) <ウ>基本的学力の充実を第一とする人について

	大正生れ 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父親 計	母親 計	父親 %	母親 %	合計
ア. 義務教育にすべき	12 1	14 17	13 16	1 19	40	53	14	15	93
イ. 希望者は全員進学	39 12	42 43	21 46	7 43	109	144	39	42	253
ウ. 何ともいえない	4 1	5 3	2 9	2 2	13	15	5	4	28
エ. 本当に勉強したい者 のみ	34 8	53 40	25 50	4 33	117	131	42	38	248

(4) <エ>芸術・体育を含む幅広い学力・教養を第一とする人は、

	大正生 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父 親 計	母 親 計	父 親 %	母 親 %	合 計
ア. 義務教育にすべき	7 1	5	1 4	1 4	14	12	20	17	26
イ. 希望者は全員進学	9 4	13 10	1 10	3 10	26	34	37	48	60
ウ. 何ともいえない		1 2	1 3	2 1	4	6	6	8	10
エ. 本当に勉強したい者のみ	10 1	14 7	1 7	1 8	26	26	37	32	49

(1), (3), (4)と(2)の進学受験との間には希望者を全員進学させるべきであるという応答で差異をみとめうるし、(2), (3)と(1), (4)との間には、本当に勉強したい者に限って進学されればよいという応答で10%近くの差をみとめることができる。

こうして高校が全入ないし義務教育に近い状況にた

ちいたったとき（現在の進学率91.9%というのもほとんどこの状態と考えてよいかもしれないが）高校を今そのままにしておいてよいはずはないであろう。それこそ今の高校問題の根源である。どのように高校教育を改編すべきか、大きくみて次の4つの選択肢をあげ、アンケートした結果は次の通りである。

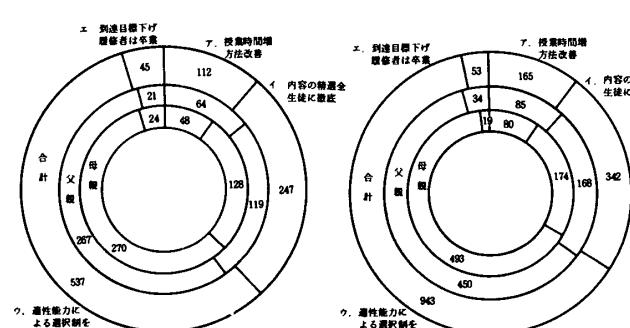
問 もし高校が義務化又は全入になった場合、高校教育をどの様に改めたらよいでしょうか。

- ア. 高校の現在程度のレベルを保持するように授業時間を増し、方法を改善すべきである。
- イ. 高校の教育内容を精選し、必要最小限度の内容をすべての生徒に徹底すべきである。
- ウ. 適性と能力によってコースを分けて選択できるよう選択制をひろげるべきである。
- エ. 教育の到達目標を思い切ってかえ、一応履修した者はすべて卒業させねばよい。

	大正生 父 母	昭和元～6 父 母	昭和6～9 父 母	昭和9以後 父 母	父 親 計	母 親 計	合 計
ア. 現在程度のレベルを保つ	39 12	65 30	35 45	10 41	149	128	277
イ. 高校の教育内容を精選する	84 22	109 74	64 84	30 122	287	302	589
ウ. コースを分けて選択させる	173 39	307 204	163 234	74 286	717	763	1,480
エ. 到達目標を思い切ってかえる	10 2	24 9	14 13	7 19	55	43	98
ア. 現在程度のレベルを保つ	12 15	13 9	13 12	8 9	12	10	11
イ. 高校の教育内容を精選する	26 28	21 23	23 22	25 26	24	24	24
ウ. コースを分けて選択させる	55 51	61 64	60 63	61 61	60	62	61
エ. 到達目標を思い切ってかえる	3 2	4 2	5 3	6 4	5	3	4

中 学

高 校



7. ま と め

最近、学校教育の再検討の要を唱える言論がかなり活発化してきた。時代の趨勢に沿って、価値の多様化に見合った、従来からの通念を打破した、柔軟な構造のものに作りかえて行くべきだとする議論である。そしてそれは、学校側に対し、相当な工夫と実験的試行と決断を要求するものである。半面、従来、教育機能を独占的に何でもとり込んでいた（あるいはとり込まれていた）学校教育のあり方にも批判の矢が向けられているのであって、その意味ではむしろ、学校教育の守備範囲縮小の考え方という面もある。そうなれば当然、家庭教育と社会教育は現在より大きな責任を負うことになろう。価値の多様化が際限なく続くものである限り、学校教育が、そのすべてをカバーすること

はどうてい不可能である。だとすれば家庭教育は多様化に対しては、教育の主体となるべきもので、その責任はかなり厳しいものと言わねばならないであろう。然るに、家庭教育のあり方については、学校教育ほどには批判の対象になっていないのは片手落ちとは言えないであろうか。学校教育に対する父兄の意識にも、さまざまのタイプがあり、ずいぶん矛盾した要求事項も少なくない。この矛盾の実態を父兄各位が自覚して、学校教育と家庭教育それぞれの、るべき姿を探求して行くことが大切であろう。

また、両親の間でかなり意識・教育観の差異のめだつものもある。アンケートに設定した世代区分で、父親と母親の反応が1段階ずれて（母親の分が一世代下に）相似を示している点が若干あったと感じている。サンプルが少ないので断定はできないが、父母の年齢差を4,5歳とみれば、家庭内で世代的相違が互いに影響し合い、同化した面もあるのではないかと思われる。アンケートを書く際に、父母の意見調整でもなされ

ば、なおさらのことである。世代間の意識の相違は決して固定的にとらえるべきものではないであろう。家庭内では、父母それぞれがストレートに子供に影響を及ぼすことはむしろ少なく、父母間の平素の連携のあり方が最大の影響力を持つと考えられる。その意味で、家庭内における父母の意識の相違ないしは同化の状況を世代差ともからめて再調査する要がありそうに思える。

最後にひととつけ加えると、世代別の意識の推移や断層の有無を正確に調べるには、これまでの何倍何十倍ものサンプルが必要であろうと思われるが、これまでのアンケートだけでも、相当の困難を伴ったのであり、こういった問題をこういう形で調査することのむつかしさを改めて痛感した次第である。

なお、この研究については、昭和50年度文部省科学研究費（奨励研究B）の交付をうけた。付記して謝意を表したい。